樽商大 施設命名権を売却

安定財源確保へ図書館など

小樽商科大は、同大の図書館や体育館など16の施設に企業や個人などに名前を付けてもらうネーミングライツ（施設命名権）の売却を始め、命名権の取得者を募集している。

教育研究環境の向上や安定的な大学運営のための財源確保が目的で、今月2日に始めた。対象施設は、学生が多く利用する図書館や体育館のほか、食堂や購買部などが入る大学会館、予備校の模試にも使われる教室など16カ所。

契約は原則3年以上で、命名権料は年間30万～150万円。法人のほか、法人格のない団体や、個人も応募できる。取得者の名前や商標名などを付けることができ、知名度の向上が期待できる。

国公立大のネーミングライツの売却の取り組みは、道内では2015年に道教大岩見沢校が始め、全国でも広がりつつある。

問い合わせは小樽商科大会計課管理係☎0134・27・5216へ。

（日野夏美）

ネーミングライツの取得者を募集している小樽商科大の図書館

令和2年11月13日　北海道新聞（朝刊/16面/地域）本学関連記事

つれづれ@小樽報道部

差し入れ

10月下旬、取材で小樽商科大の学生にインタビューをしていた。新型コロナウイルス感染予防のためのオンライン授業実施で、キャンパス内に学生の姿は少なく、4時間滞在。帰ろうかと荷物を整理していた時、「お仕事大変ですね。もし良かったら」と女子学生がお茶をくれた。

以前、学内での講演を取材した精神科医の香山リカさんは、新型コロナ禍で今までの葛藤や問題に不安が上乗せされ、人の役に立っていると実感できない人が増えていると解説。コロナに負けずに過ごすためには「目の前の小さな出来事を楽しむことが重要だ」と話していた。

記者も人の役に立てているか実感出来ない日々が続いていた。コロナ禍の取材は感染者の発表、イベントの中止などが多く、取材先からは「もっと明るい話題を読みたい」「記者は多くの人に会い、無症状で拡散させているのではないか」と言われることもあった。

お茶の差し入れは「自分は人の役に立てているのだろうか」と悩んでいた時期の出来事だった。感染予防に気を使い、人との距離を取らなければいけない中、人の温かさに触れた。（日野夏美）